R. ヴァーグナーにおけるトリスタンとジークフリート

石川　栄作

Tristan und Siegfried bei Richard Wagner

Eisaku ISHIKAWA

Abstract

Richard Wagner unterbrach 1857 die Vertonung seines Werks „Siegfried“ und machte sich an die Herstellung des Werks „Tristan und Isolde“. Man kann dabei viele Anlässe zum neuen Werk nennen, aber ich will hier als meine originelle Ansicht darauf hinweisen, dass die Tristansage seit langem in seinem Bewusstsein vorhanden war, weil Tristan und Siegfried bei R. Wagner, oberflächlich viele Gemeinsamkeiten besitzend, doch wesentlich im auffallenden Kontrast stehen.

Die erste Gemeinsamkeit besteht darin, dass sowohl Tristan wie auch Siegfried als Waise von einem Dritten aufgezogen wurden. Tristan wurde dabei sehr sorgsam von einem treuen Diener Kurwenal gepflegt, aber Siegfried wuchs bei einem untreuen Schmied Mime heran, den er später wegen dessen Untreue ermordet.

Jeder verwaist gewachsene Held begegnet bald einer Frau, mit der jeder sich durch die schicksalhafte Liebe verbindet. Das ist die zweite Gemeinsamkeit. Die Liebe zwischen Tristan und Isolde keimt aber anfangs nur undeutlich, während die Liebe zwischen Siegfried und Brünnhilde von Anfang an, nein, schon vor der Geburt Siegfrieds verhängnisvoll deutlich geschildert wird. Diese bildet einen Kontrast zu jener.

Die Liebe zwischen die Hauptpersonen, sei es auch undeutlich oder deutlich, schneidet der Heiratsantrag jedes Königs ab. Dadurch entfaltet sich jedes

Dreiecksverhältnis als die dritte Gemeinsamkeit. Beide sind aber im wesentlichen erheblich verschieden: Tristan wird aus seinem eigenen Willen der Bote des Königs Marke und soll trotzdem durch das Liebesgetränk die Königin Isolde lieben, aber Siegfried hilft dem König Gunther bei der Werbung um Brünnhilde, nachdem er durch das Vergessensgetränk seine Geliebte Brünnhilde vergessen hat.

So spielt das Getränk bei jeder Entfaltung des Dreiecksverhältnisses eine wichtige Rolle. Bei Tristan erscheint die Liebe durch das Liebesgetränk aus dem Hass, während der Hass bei Siegfried durch das Vergessensgetränk aus der Liebe hervorgeht. Beide stehen im Gegenteil, aber jedes Getränk verursacht als die vierte Gemeinsamkeit den Tod der beiden Helden. Dabei ist der Unterschied selbstverständlich anzuerkennen: Tristan versucht dreimal sozusagen Selbstmord zu begehen, aber Siegfried verliert sein Leben durch Meuchelmord, mit dem der Fluch des Rings verhängnisvoll zusammenhängt. Dieser Tod bildet einen auffallenden Kontrast zu jenem.

Die Frauen der beiden Helden folgen um ihren geliebten Herrn im Tode, dadurch wird die Liebe bei jedem wiedergeboren. Die fünfte Gemeinsamkeit liegt in der Wiedergeburt der Liebe. Der Liebestod bei Isolde unterscheidet sich aber von dem Selbstofer bei Brünnhilde. Bei dem Liebestod verbindet sich Isolde, nach dem langen Schweigen der Liebe und nach dem Ringkampf mit „der Welt des Tages", endlich in der sehnsüchtigen „Welt der Nacht" mit Tristan, wodurch die beiden die Liebe und den Tod vereinigen. Bei dem Selbstofer verbindet sich Brünnhilde endlich durch den Hineinsprung in das Feuer, das den Leichnam des geliebten Herrn brennt, mit Siegfried, wodurch „die Welt der Liebe" für „die Welt der Macht" neu entsteht.

„Die Welt der Liebe" und „die Welt der Macht" im „Ring des Nibelungen" entsprechen „der Welt der Nacht" und „der Welt des Tages" in „Tristan und Isolde". „Die Welt der Liebe" bei Siegfried und Brünnhilde ist gerade „die Welt der Nacht" bei Tristan und Isolde. Tristan in „der Welt der Nacht" ist ja Siegfried in „der Welt der Liebe". Mit einem Wort kann man den Unterschied der beiden Helden sagen: „Nacht"-Tristan und „Licht"-Siegfried. Wie das Licht erst durch die Nacht noch deutlicher scheint, konnte R. Wagner erst durch die Nacht-Welt des Werks „Tristan und Isolde" zur wahren Licht-Welt des Siegfrieds gelangen.

„Tristan und Isolde“ ist die aus der Nacht-Welt gesehene Geschichte von der gleichen „Wiedergeburt der Liebe durch den Tod“ wie „Der Ring des Nibelungen“. Der Unterbrach der Vertonung des Werks „Siegfried“ ist also im strengen Sinne nicht „Unterbrach“, sondern „der lange dunkle Tunnel“, durch den R. Wagner mit Mühe und Not hindurchgehen sollte, um „Den Ring des Nibelungen“ fertig zu machen.

序

R. ヴァーグナー（1813-83）は『ニーベルングの指環』四部作のうちの三作目の楽劇『ジークフリート』第二幕を作曲しているとき、この畢生（ひっせい）の四部作が周囲の状況から見て上演の可能性がないことを悟り、比較的簡単に上演できて一般受けする小さな作品を作ることを考えた。そのとき浮かんできたのが、ずっと以前のドレースデン時代から関心を抱いていたトリスタン伝説であり、ヴァーグナーは 1857 年『ジークフリート』の作曲を中断して、楽劇『トリスタンとイゾルデ』の製作に取り掛かった。最初は小さな作品にする予定であったが、台本を書き、それに曲を付けているうち、作品はだんだんと膨らんでいき、現在のとおりの超大作となって、1859 年についに全曲の完成を見た[1]。

この画期的な作品の製作に際して大きな影響を与えたのものとして、チューリヒ近郊に「隠れ家」を提供してくれた富裕な商人オットー・ヴェーゼンドンクの妻マティルデとの恋愛が挙げられるが、しかし、もちろんマティルデとの恋愛だけでこの作品が出来上がったのではない[2]。そのほかにショーペンハウアーの『意志と表象としての世界』との出会い[3]、さらには当時ヴァーグナーは死について思索をめぐらせる日々を送っていた[4]ことなども関係しているであろう。さまざまな要素が折り重なって、ヴァーグナーは『トリスタンとイゾルデ』に取り掛かったと考えてよいだろう。

---

1) 三光長治・高辻知義・三宅幸夫監修『ワーグナー事典』東京書籍 2002 年 485-7 頁および音楽之友社編『スタンダード・オペラ鑑賞ブック［4］ドイツ・オペラ（下）ワーグナー』92-3 頁参照。

2) ハンス・マイヤー（天野晶吉訳）『リヒャルト・ワーグナー』芸術現代社 1983 年 132-3 頁参照。

3) リヒャルト・ヴァーグナー（山田ゆり訳）『わが生涯』勁草書房 1986 年 595-8 頁参照。

4) 伊藤嘉啓『愛の運命―ワーグナー像を求めて―』鳥影社 2002 年 196-200 頁参照。

そのさまざまな要素のうちの一つとしてここで私が独自の意見として主張したいのは、その当時作曲中だった『ジークフリート』の物語内容も大いに関係していたのではないかということである。ヴァーグナーは『ジークフリート』を作曲しているときには、常にその脳裏の中にトリスタン伝説が潜在的に存在していたのではなかろうか。なぜなら、トリスタンとジークフリートの間には興味深い数多くの共通点とともに、著しいコントラストを成す相違点が読み取られ、両者は裏返しの関係にあることが読み取られるからである。ヴァーグナーは当時携わっていた『ジークフリート』、つまりは『ニーベルングの指環』四部作の作曲を完成させるためには、まずは独自のトリスタン世界を構築する必要があったのでないかと、私は考えるのである。

そこで本稿では、ヴァーグナーにおけるトリスタンとジークフリートの共通点とともに、相違点をも指摘し、両者は裏返しの関係にあることを主張しながら、『トリスタンとイゾルデ』[5]の製作が『ジークフリート』、ひいては『ニーベルングの指環』四部作[6]の完成になくてはならないものであったことを確証することにしたい。

I. 主人公たちの誕生と少年時代——孤児としての養育——

まずヴァーグナーの作品において、二人の英雄トリスタンとジークフリートについて第一の共通点として挙げられるのが、いずれも孤児として生まれ、そののち他人によって養育を受けているということである。

ヴァーグナーは自らの『トリスタンとイゾルデ』の世界を作り上げるにあたってはドイツ中世叙事詩人ゴットフリート・フォン・シュトラースブルクの作品（1210年）[7]を素材に用いているが、そこで展開されているトリスタンの両親の物語をことごとく削除している。そのためトリスタンの両親について詳細を知ることはできないものの、第三幕第一場で重傷のトリスタンが羊飼いの悲しい調べに耳を傾けているとき、次第に重苦しい気持ちに包まれて、両親の訃報に触れた幼い日のことを回想している場面から、両

---

5) 本稿においてテクストにはオペラ対訳ライブラリー『ワーグナー　トリスタンとイゾルデ』（高辻知義訳）音楽之友社2000年を用い、邦訳は高辻訳を参照しながら拙訳を試みる。

6) 本稿においてテクストにはオペラ対訳ライブラリー『ワーグナー　ニーベルングの指環（上）（下）』（高辻知義訳）音楽之友社2002年を用い、邦訳は高辻訳を参照しながら拙訳を試みる。

7) ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク（石川敬三訳）『トリスタンとイゾルデ』郁文堂1976年

親がすでに死んでいることが分かる。その場面によると、羊飼いの懐かしい調べは、幼かった自分に父の死が告げられたときも、また母が自分を産んで死んだときも、嘆きの風に乗って聞こえてきたのであり、かつて自分に問いかけてきたその調べは今もなお、「自分はいかなる運命に定められて、そのとき生まれたのか」と自分に問いかけているようにトリスタンには思われる。トリスタンという名前がすでに「悲しみ」（トリステ）を意味している[8]ように、トリスタンは「悲しい運命」のもとに生まれたのであるが、さらにここでは生い立ちだけではなく、その後の悲しい運命もほのめかされているところにヴァーグナーの特徴がある。すなわち、ここでトリスタンはその「決して途絶えることのないその調べ」を耳にして、「今やあこがれを込めつつ、／死の安らぎを求めて」、遠くにいるイゾルデへのあこがれを強くしているのであり、二人が最後に辿り着く「愛の死」は宿命的であることが暗示されているのである。

いずれにしてもトリスタンは孤児として生まれ、その後はゴットフリートの作品においてと同じように忠実な従僕クルヴェナルによって大切に養育されたのであろう。従僕によって大切に養育されたことは、第三幕第一場のその後の展開においてクルヴェナルがすでにイゾルデを呼びに使いを出していることを知ったとき、トリスタンは彼に感謝をこめて、「ゆるぎない真心の友に、／トリスタンはどうやって礼をしょうか？」と言いながら、これまでのクルヴェナルの数々の忠節を挙げていることからも明らかである。またそのあと主人トリスタンが気を失って後ろに倒れたときにも、すすり泣きながら主君のことを心配する姿からも明らかであり、さらには第三幕第三場でマルケ王とその従者たちが城内に入って来たとき、自ら深手を負いながらも、主君トリスタンの足もとにくず折れて、忠実に主君のお供をして息絶える場面からも容易に窺えよう。原作のゴットフリートにおいてよりもクルヴェナルの忠実さがさらに一層高められているところにヴァーグナーの特徴があると言ってもよいであろう。

一方、ジークフリートの方も孤児として生まれ、その後他人の手によって養育されるが、トリスタンの場合と違って主人公を養育する鍛冶屋ミーメは不実な男として描かれている。ヴァーグナーは主な素材として『ヴォルスンガ・サガ』（1250-60 年頃成立）[9]を用いたが、もちろん人物関係については多少の変更を加えて、人物関係を簡単化している。すなわち、素材の『ヴォルスンガ・サガ』において英雄シグルズの父シグムンド

---

8) 同上書 34-5 頁参照。

9) 菅原邦城訳・解説『ゲルマン北欧の英雄伝説　ヴォルスンガ・サガ』東海大学出版会 1979 年

は三度にわたって妻を娶っていて、シグルズはその三人目の妻ヒョルディースとの間に生まれることになっているが、ヴァーグナーではその三度にわたる結婚を簡単化し、最初の近親相姦によって生まれるシンフィエトリをジークフリートに見立てて、英雄ジークフリートは双子の兄妹ジークムントとジークリンデの間に生まれた子としている。しかもヴァーグナーはヴォータンを直接その双子の父として登場させており、素材の『ヴォルスンガ・サガ』（オーディンはシグルズの祖先として設定されている）よりもかなり簡単化されていることが明らかである。そしてヴァーグナーはその双子の兄妹の物語を『ヴァルキューレ』第一幕において詳しく展開させて、独自の新しい双子兄妹の愛の物語を作り出している。こうして双子の兄妹の間に愛が芽生えて、妹ジークリンデは兄ジークムントの子供を身ごもり、第二幕最終場面においてジークムントがフンディングとの戦いで倒れたとき、ヴァルキューレの一人ブリュンヒルデに救い出されたあと、第三幕において東方の森の中に逃げのびて、やがてそこで一人の男子を産むことになっている。この男子が英雄ジークフリートであり、続く『ジークフリート』第一幕の展開からすると、母ジークリンデは森の中で男子を産むや否や、息を引き取ることになっている。

このようにヴァーグナーではジークフリートは完全な孤児であり、この孤児を養育するのが鍛冶屋ミーメであるが、この養父についても、ヴァーグナーでは素材の『ヴォルスンガ・サガ』のように凶悪な竜ファフナー（ファーヴニル）の弟としてではなく、ニーベルング族の王アルベリヒの弟として登場し、名前もレギンからミーメに変えられて、不実な男として描かれている。ニーベルングの指環を一人占めにするために悪いことを企んでいるミーメを最後にはジークフリートは殺害するのであり、この養父ミーメとジークフリートの物語をかなり詳細に独自の方法で展開させているところにヴァーグナーの特異性があると言ってもよいであろう。

Ⅱ．主人公たちの出会い――愛の芽生え――

こうしてヴァーグナーにおいては孤児として生まれ、養父に育てられて成長した若者トリスタンとジークフリートは、それぞれの作品の中で一人の女性と出会い、その女性とは最初の出会いから宿命的な愛によって結び付けられていることが明らかである。これが第二の共通点である。

トリスタン伝説においてトリスタンがアイルランドの王女イゾルデと出会うきっかけとなるのは、騎士モーロルトとの決闘で毒槍によって傷つけられたことである。ゴットフリートの作品を素材としたヴァーグナーにおいてもそのとおりであるが、ただヴァ

ーグナーでは第一幕でトリスタンが重傷を負うモーロルトとの決闘のエピソードはその第三場でイゾルデによって「タントリスの歌」として語られるに過ぎない。それによると、一艘のみすぼらしい小舟に乗って、病み衰えた男がアイルランドの岸に流れ着いた。そこのイゾルデ姫が膏薬と合わせて、薬酒も用いて、男の傷の手当てをした。男は正体がばれるのを怖れて、「タントリス」と名乗ったが、男の剣の破片からイゾルデは、この男が彼女の許婚でもあったモーロルトの殺害者であることを悟った。イゾルデは抜き身の剣を持って、モーロルトの仇を討とうとして、男の前に立った。ところが、寝床に病み伏す男の眼差しは、白刃ではなく、彼女の瞳へ見入った。そこで彼女は男の哀れなさまに同情して、剣を手から落としてしまった。さらに彼女はモーロルトが傷つけたそのトリスタンの傷を治してやった。その理由をイゾルデは、「その眼差しで再び彼女の心を煩わさないように、／トリスタンが快癒して彼の国へ帰って行くようにするため」であると語っている。それ以上の深い意味のことをイゾルデは口にしていないが、あとの展開からすると、このときすでにトリスタンとイゾルデの間には互いに秘められた愛情が芽生え始めていたと理解できる。素材となったゴットフリートの作品では、トリスタンの傷を治すのはイゾルデの母であるが、刃こぼれに気づいてモーロルトの仇を討とうとするのはヴァーグナーと同じくイゾルデ姫であり、その場面においては「やさしい女らしさが彼女の身に備わっていて」、そのとき「やさしい女らしさが怒りに打ち勝って」、イゾルデはトリスタンを討つのを止めたとされている。素材では主人公たちの間に愛情が芽生えていたとは、はっきりとは言えない。そのような素材にヴァーグナーは若干の変更を加えて、あいまいながらも「眼差し」によって二人の間には愛情が芽生え始めていたと修正を施したのである。そのほのかな愛情の芽生えがのちの「愛の媚薬」によって一気に表面に現れることになるのであり、そこにヴァーグナーの特徴があると言えよう。

では、一方のジークフリートの方はどうだろうか。ジークフリートとブリュンヒルデの場合は、最初の出会いからではなく、さらにずっと以前ジークフリートが母ジークリンデの胎内にいるときから宿命的に結ばれる関係にある。これは従来のニーベルンゲン伝説においてはどこにも見出せない、ヴァーグナー特有のものである。

ヴァーグナーにおけるジークフリートとブリュンヒルデの結び付きは、『ヴァルキューレ』第三幕第一場でブリュンヒルデが双子の妹ジークリンデを東の方にある森に逃がしてやる前に、彼女の胎内には「この世で最も気高い英雄を／抱いている」ことを教える場面にまで遡る。そのときブリュンヒルデは双子の兄ジークムントの剣の破片を渡しながら、「この破片から剣を鋳なおして、／いつかそれを振り上げる人の名を、／私が

名付けてあげましょう」と言って、やがて生まれ出る男の子に「勝利を喜ぶ英雄、ジークフリート」という名前までも授けるのである。このときからすでに二人の結び付きは宿命的である。

その宿命的な結び付きがさらに具体的にはっきりしてくるのが、『ヴァルキューレ』第三幕第三場で父ヴォータンから命令違反の罰として、深い眠りに閉じ込められて、ブリュンヒルデはその目覚めさせた男の妻となることを宣言されたときである。臆病な男の餌食となることを避けるために、ブリュンヒルデは唯一の願いとして、「恐れを知らず、／最も自由な英雄だけが／この岩の上に、／いつか私を見出すことができるように」、自分の周りに炎を燃え上がらせてほしいと懇願するが、ここで「恐れを知らず、／最も自由な英雄」がジークフリートを意味していることは、そのとき奏でられる「ジークフリート」のライトモチーフによって明らかである。二人はここですでに強い絆で結び付けられていると言ってもよいであろう。

ジークフリートが初めてブリュンヒルデの存在を聞き知るのは、『ジークフリート』第二幕で竜に化けた巨人ファフナーを退治してから、その血を舌に舐めて小鳥の声が理解できるようになってからである。その小鳥の声に従って洞穴の中で指環と隠れ頭巾を手に入れ、さらには悪いことを企むミーメを殺害したあと、ジークフリートは「高い岩山の上に眠っているブリュンヒルデ」の存在を教えてもらい、「その炎を通り抜けて、／花嫁を目覚めさせたら、／ブリュンヒルデは彼のものになる」ことを知るのである。しかもそれができるのは、「臆病者ではなく、／恐れを知らない者だけだ」という。この小鳥の声に従ってジークフリートは彼女の眠る岩山をめざして突き進むのである。

その途中でヴォータンの槍を打ち破って、ジークフリートはようやくその岩山に辿り着く。そこで鎧を身に着けて眠っているのが、男性ではなく、女性であることを悟って、ジークフリートは初めて恐れというものを知る。鎧と兜の紐を断ち切って、眠っている彼女に口づけすると、ブリュンヒルデは長い眠りから目覚める。目覚めた瞬間、自分を目覚めさせてくれたのはジークフリートであることを悟り、以前から自分が彼を愛していたことを知らせる。しかし、それはどちらかと言えば、母親が生まれてくる子供に対して抱くような愛情である。そのためジークフリートは一瞬、ブリュンヒルデを母親だと思って、「愛する母はただ眠っていただけですか」と尋ねる。そのようなジークフリートに対してブリュンヒルデは、「あなたが神聖なこの私を愛するなら、／私があなたそのものになります。／あなたが知らないことは、／私があなたに代わって知っています。／私に知識があるのは、／ただあなたを愛しているからなのです」と、ジークフリートとの出会いをずっと以前から待ち受けていたことを口にする。しかし、これまで自

分が身に着けていた兜や鎧がそばに落ちているのを見るや否や、もはや自分がかつてのヴァルキューレ（戦乙女）としてのブリュンヒルデではないことを悟って、不安を抱き始める。それとは逆に初めて女性の姿を見て恐れを感じ、愛に目覚めたジークフリートは、ますます執拗にブリュンヒルデに愛を求める。最初はためらいながら拒否していたブリュンヒルデも、最後には神の身分を捨てて、人間として愛に生きる決意をし、ジークフリートの愛を受け入れて、ジークフリートとともに愛の二重唱を歌い上げる。素材の『ヴォルスンガ・サガ』ではシグルズとブリュンヒルドは二度出会い、二度婚約を交わすことがごく簡単に数行で済まされているのに対して、ヴァーグナーではこのように二人の愛の結び付きを感動的に詳しく展開させているのであり、そこにヴァーグナーの特徴があると言える。

Ⅲ. 国王たちの求婚――三角関係――

このように『トリスタンとイゾルデ』では主人公たちの最初の出会いの際には愛情の芽生えがあるとはいえ、あまりはっきりしたかたちで現れていないのに対して、『ジークフリート』では主人公たちは従来の伝説にはどこにも見出せないような強烈な愛の結び付きが感動的に展開されている。両者は著しいコントラストを成しているが、ほのかな愛であれ、強烈な愛であれ、いずれの場合にもその主人公たちの愛を裏切るきっかけとなるのが国王たちの求婚である。国王たちの求婚によって三角関係が展開されることになるという点でも両者は共通している。これが第三の共通点である。

ヴァーグナーの『トリスタンとイゾルデ』ではこのように主人公たちの間にはかすかながら愛情が芽生えているのであるが、それにしても一体なぜトリスタンはマルケ王のイゾルデ姫への求婚の使者となったのであろうか。

素材のゴットフリートの作品ではマルケ王に可愛がられているトリスタンに嫉妬と憎しみを抱いている宮廷顧問官たちが、トリスタンに難題を押し付けるために、トリスタンが礼賛してやまないアイルランドのイゾルデ姫との結婚をマルケ王に進言して、その敵国への求婚の使者をトリスタンに押し付ける。マルケ王はそれに反対するが、トリスタンはそれを承諾して、アイルランドへ出かける。トリスタンはそこの国を荒らしていた竜を退治し、そのとき意識を失い、再度イゾルデ姫の母であるイゾルデ王妃の治療を受けることになっている。その折りトリスタンがモーロルトの殺害者であることが露見してしまうが、すでに述べたように、イゾルデ姫の「やさしい女らしさ」でトリスタンの命は助けられるばかりか、イゾルデ姫をマルケ王の花嫁とすることに成功する。そこにはこの婚姻によって長年アイルランドとコーンウォルとの間に繰り広げられてき

た争いも解決されると考えられたこともあったようである。

素材ではこのようになっていたところをヴァーグナーは、伝統的なエピソードをことごとく削除して、いきなりイゾルデがコーンウォルに向かう船の中でトリスタンに対して怒りを抱いている場面にしている。トリスタンがマルケ王の求婚の使者となった経緯については具体的には展開されていないので、そのあたりの事情があいまいであると言わざるを得ないが、第二幕第三場におけるマルケ王の言葉によると、マルケ王は二度と妻を娶るまいと思っていたのに、人々が国のために妃を迎えるよう願ったりしたうえ、トリスタンまでもがそれを懇願したので、隣国の王女イゾルデを妃に迎えたのだという。しかし、それでもトリスタンがイゾルデとの結婚をマルケ王に勧めた理由はあいまいのままである。その理由に関しては、第一幕第三場で侍女ブランゲーネがイゾルデに説いて聞かせる言葉からある程度真実に近いものが読み取られるのではあるまいか。それによると、世にもすばらしいコーンウォルの王冠をイゾルデに授けることこそ、いろいろとお世話になったイゾルデへのトリスタンの恩返しであり、自らが継ぐはずの遺産をトリスタンは、純粋な心で気高くもあきらめて、王妃となるイゾルデに譲ることによって、臣下の礼を示そうとしているというのである。トリスタンにしてみれば、そのように自らの気持ちを抑えてまでもマルケ王に忠誠を尽し、そのことによってコーンウォルとアイルランドの間に「平和と和解と友好」をもたらすことの方が大事だったのである。しかし、一人の女性としてのイゾルデから見れば、トリスタンがマルケ王に自分を戦利品のように譲ったことは、このうえない侮辱であり、またあとから分かるようにトリスタンにほのかな愛情を抱いていただけに、トリスタンの行為を許すことができず、彼女は彼に大きな怒りを覚えているのである。

そこでイゾルデは口実としてモーロルト殺害の償いを持ち出して、トリスタンに「死の毒薬」を飲ませてから、自らもあとでそれを仰いで、この屈辱を終わらせようとする。侍女ブランゲーネに「死の毒薬」を用意するように命じてから、トリスタンを呼び出して、差し出す杯を飲み干すように要求する。トリスタンはその中には毒が入っていると知りながらも、たじろぐことなくそれを飲む。まさに自殺行為である。するとイゾルデもすばやくその杯を奪い取って、残りの半分を飲んでしまう。たちまち戦慄に襲われた二人は、お互いの目を食い入るように見つめ合っている。二人の死を恐れないという気持ちは、やがて愛の炎へと変わっていく。二人は杯に入っているものを「死の毒薬」と思って飲んだが、しかし、それは侍女ブランゲーネが擦り替えていた「愛の媚薬」であった。まさにここに従来のトリスタン伝説には見出されない、ヴァーグナーの独創性がある。二人の愛はずっと以前、トリスタンがタントリスとして病み伏してイゾルデの瞳

を見つめていたときに芽生えていたのであるが、それはこれまで沈黙のままであった。その愛が沈黙を破って、かたちとなって表面に現れるきっかけとなったのが、「死の毒薬」と思って飲んだ「愛の媚薬」だったのである。二人は死を覚悟していたのに、その杯をともに飲むことによって、愛を耐え忍んでいかなければならない運命を背負うこととなった。二人の間にはマルケ王が存在するのであり、互いに愛するがゆえに、二人にはこれから苦しむ日々が始まるのである。その愛の苦しみを第二幕で取り扱い、「昼の世界」と「夜の世界」の対立の中で二人の「夜の国」へのあこがれを展開しているところにヴァーグナーの特異性があると言えよう。

では、一方のジークフリートとブリュンヒルデの場合はどうであろうか。トリスタンとイゾルデの間にマルケ王がいたように、ジークフリートとブリュンヒルデの間にはグンター王がいる。三角関係という点で共通しているが、その本質はかなり異なっているように思われる。トリスタンは自らの意志でマルケ王の求婚の使者となったのに対して、ジークフリートの場合はハーゲンの謀（はかりごと）によって忘れ薬を飲まされて、ブリュンヒルデのことを忘れてグンター王の求婚の使者となるからである。

ブリュンヒルデと愛で結ばれたジークフリートは、英雄である限り、冒険の旅を続けなければならない。ジークフリートはブリュンヒルデを一人岩山の上に残して旅立って行く。辿り着いたのは、素材の『ヴォルスンガ・サガ』と同じく、ライン河畔ギービヒ家の館である。そこの当主は素材ではギューキ王（ギービヒ王）であり、その王妃グリームヒルドがあらすじを動かす重要な役割を果たしているが、ヴァーグナーではその当主の座に就いているのは息子グンターとしている。グンターには弟ハーゲンと妹グートルーネがいるが、ハーゲンは彼らとは異父兄弟ということになっている。しかもヴァーグナーではこのハーゲンは素材においてのように単なる無名の妖怪の子ではなく、あの侏儒（こびと）アルベリヒの息子として登場しているところにヴァーグナーの独創性がある。ギービヒ家の館ではこのハーゲンが主導権を握っているのであり、素材の『ヴォルスンガ・サガ』では王妃グリームヒルドが果たしていた役割がすべてヴァーグナーではこのハーゲンに移されている。すなわち、素材ではグンナル王（グンター王）にブルンヒルド（ブリュンヒルデ）への求婚を勧めたのは母后グリームヒルドであったが、ヴァーグナーではハーゲンがグンターにブリュンヒルデの存在を教え、彼女への求婚を勧めている。それと同時に、ハーゲンはブリュンヒルデの周りに燃えている炎を突き破ることのできる英雄としてジークフリートを挙げ、彼をグートルーネの夫に迎えるようにと進言するのである。ハーゲンの魂胆はもちろんニーベルングの指環を奪い取ることにある。その秘策としてハーゲンはさらに不思議な忘れ薬を用いることを提案する。この

忘れ薬を英雄シグルズに飲ませるのも『ヴォルスンガ・サガ』では母后グリームヒルドであったが、ヴァーグナーではハーゲンの指示によってグートルーネがジークフリートに飲ませることになっている。しかもその忘れ薬はここではジークフリートが出会った過去の女性をすべて忘れさせるとともに、眼の前にいる女性にたちまち惚れさせてしまうという効き目を持っている。このような秘薬の存在を知り、しかも英雄ジークフリートがやがてこのギービヒの館にやって来るだろうことを聞いたグンターとグートルーネは、喜んでその英雄を出迎える決意をする。すべてがハーゲンの策略どおり進んでいることが明らかである。

やがてそこへ英雄ジークフリートが到着して、ハーゲンの策略どおりのことが展開されて、ジークフリートは忘れ薬を飲まされ、ブリュンヒルデのことを忘れ果てて、目の前にいるグートルーネにたちまち魅せられて、彼女と契りを結びたいがために、グンターがブリュンヒルデへ求婚するのに手助けすることになる。その際に用いるのが、かつて竜ファフナーを倒したときに入手した隠れ頭巾である。

こうしてグンターとの間に「兄弟の契り」を結んだジークフリートは、ブリュンヒルデのいる岩山へ向かう。一方、ブリュンヒルデは周りの炎がだんだんと燃え盛り、遠くからは角笛の響きも聞こえてきたので、ジークフリートが帰って来たものとばかり、熱狂して飛び起き、夫を出迎えようとするが、しかし、英雄は隠れ頭巾を被り、ジークフリートの姿ではなかったので、彼女は驚き退いてしまう。言葉もなく、驚いて見つめている彼女に向って、男は彼女を妻にするために炎を越えてやって来たことを告げて、ギービヒ家の者で、グンターという英雄だと名乗り、自分について来るようにと強要する。『ヴォルスンガ・サガ』ではこの場面でブリュンヒルドは何の抵抗もしないでグンナル姿の男の要求に従っているのに対して、ヴァーグナーではブリュンヒルデは激しく抵抗している。この点でグンテル姿のジーフリトがプリュンヒルトと争う『ニーベルンゲンの歌』(665-77 詩節) に通じるところもあるが、しかし、ヴァーグナーではブリュンヒルデは指環でもって激しく抵抗するのであり、その指環に大きな意味を込めている点で著しく異なる。指環はブリュンヒルデにとってはジークフリートへの貞節への証であり、指環を威嚇的に突き出して抵抗するが、男にとっては「奪い取れと言わんばかりに／指環を見せてくれている」に過ぎない。激しい格闘の末、男はついに彼女から指環を奪い取ると、ブリュンヒルデはもはや身を防ぐ術（すべ）がないことを悟る。男が命令する動作で彼女を追い立てると、彼女は身震いしながら、よろよろと部屋の中に入って行く。しかし、そのとき隠れ頭巾の男ジークフリートは剣を引き抜いて、それを自分と彼女の間に置くことによって、グンターとの「兄弟の契り」を忠実に守る。抜き身の剣を男女

の間に置くというモチーフは、素材の『ヴォルスンガ・サガ』に基づくものであるが、このモチーフが伝統的なトリスタン伝説においても有名な「モロアの森」の中でマルケ王が恋人たちの姿を見つけた場面で用いられていることは興味深い。それはともかくこうしてジークフリートは忘れ薬を飲まされることによって、愛するブリュンヒルデを知らず知らずのうちにグンターの妻としてしまうのである。

このように見てくると、三角関係というあらすじの展開にはいずれの作品においても「薬」というものが重要な役割を果たしていることが分かる。トリスタンとイゾルデの場合は、コーンウォルに向かう船の中で「死の毒薬」と思って飲んだものが、実は「愛の媚薬」だったのであり、二人の間では「憎しみ」が「愛」となって、それ以降マルケ王の目を気にしながらも激しく愛するようになる。一方、ジークフリートはハーゲンの策略によって「忘れ薬」を飲まされて、愛するブリュンヒルデのことを忘れ果てて、最後にはブリュンヒルデから「愛」に代わって「憎しみ」を受けることになる。このようなことを考えると、両作品は興味深い裏返しの関係にあるとも言える。

IV. 英雄たちの最期——自殺行為と他人による暗殺——

このようにトリスタンの場合は重要な役割を果たす「愛の媚薬」で「憎しみ」から「愛」が表に現れ出て、またジークフリートの場合は「忘れ薬」によって「愛」からのちには「憎しみ」が生まれてくることになるのであり、ちょうど裏返しの関係にあると言えるが、しかし、いずれもそれらが英雄たちの死につながっているという点では両者は共通している。これが第四の共通点であり、もちろんそこにはまた同時に著しい相違も認められる。

まずトリスタンの場合、伝統的なトリスタン伝説とは異なって、ヴァーグナーの作品においては自殺行為を取っていることが特徴である。まさに第一幕でイゾルデが差し出す「死の毒薬」を飲むということ自体がすでに自殺行為であり、それを含めるとトリスタンは三度にわたってそれぞれ幕ごとに自殺行為を図っていると言える。第一幕で「死の毒薬」と思って飲んだものが、実は「愛の媚薬」だったのであり、それによってトリスタンは第二幕において愛の苦しみを味わわなければならない。確かにトリスタンはその薬を飲むことによって「奇蹟の夜の国」の中でイゾルデの真の姿を見ることができたが、しかし、イゾルデを「昼間の世界」の国王に譲らねばならず、そのためにイゾルデの方もまた味気ない昼間の輝きの中で一人さびしく生きていかなければならない。この苦しみをどのようにして耐えていったらよいのか。この二人の愛の苦しみを展開させているのが第二幕であり、「昼の世界」と「夜の世界」との対話を展開していく中で、二

人は今や「夜に捧げられた身となった」ことを悟り、今こそ二人で「夜の世界」に行くべきだとして、その「夜の世界」に浸っているところに突然「昼の世界」が入って来た。第三場となって、メーロトの手引きでマルケ王が家臣らとともにそこに姿を現したのである。マルケ王は、上ですでに述べたように、二度と妻を娶るまいと決めていたところ、家来たちのみならず、トリスタンまでもが国のために妃を迎えるよう懇願したので、隣国の王女イゾルデを妃に迎えたのに、このような恥辱を与えるのはどうしてかと、そのわけを尋ねるが、それに対してトリスタンは「それを申し上げるわけにはいかない」と答えるだけで、これまでのことを弁解する気もない。今やトリスタンはマルケ王とは別の世界にいるのであり、マルケ王の言葉には無関心のまま、イゾルデに向かって、自分について来てくれるかと尋ねる。トリスタンが思っているのは、太陽の光が輝くことのない国であり、その夜の国こそ、彼の母が自分を身ごもり、息絶えながらも、自分を光のもとへ送り出した「母の愛の隠れ家」であり、その夜の不思議な国で、その闇から自分は目覚めたのだと言う。まさにその国をトリスタンはイゾルデに見せたいので、先立って行く自分について来てくれるかと、その返事を要求する。するとイゾルデは同意を示し、そこへ行く道を教えてほしいと頼む。イゾルデの気持ちを確かめて、トリスタンがイゾルデの上に屈みこんで額に接吻しようとしたとき、メーロトが剣を抜いて戦いを挑んできた。トリスタンはメーロトこそ自分の友で、自分を大切にしてくれたが、しかし、自分の心を唆して、名誉と名声を守るためにマルケ王にイゾルデを娶らせるよう仕組んだのも彼であったことを告白するとともに、さらにはイゾルデの眼差しがメーロトの心をも惑わし、その嫉妬からマルケ王に密告したことを打ち明けながら、メーロトの剣に向かって自らの身を投げ出すのである。まさに自殺に等しい行為である。しかし、第三幕に入って、それでもまだイゾルデは「昼の世界」にいるので、トリスタンは故郷カレオーレの地で再び目覚めて、「昼の世界」に戻る。忠実な従僕のクルヴェナルがイゾルデに使いを出して呼び寄せていることを知り、やがてついにイゾルデが彼のもとに急いでいることを悟ると、トリスタンは今度は突然包帯を引き裂き始めた。三度目の自殺行為である。伝統的なトリスタン伝説とは逆に、イゾルデがやって来ることはトリスタンにとって「夜の世界」に入ることである。トリスタンはやがて到着したイゾルデの腕に抱きとめられたまま、彼女の名前を口にしながら、息を引き取る。伝統的なトリスタン伝説であれば、イゾルデの到着はまだなお生き延びる力を与えるはずであるが、ここではイゾルデが間に合ったにもかかわらず、彼女の到着と同時にトリスタンは「夜の世界」に入るのであり、その点でもヴァーグナーにおけるトリスタンの死はトリスタン伝説の中にあっても特異性を有するものである。

このようにトリスタンの死はいわば「自殺行為」に基づくものであるが、それに対してジークフリートの死は逆に「他人による暗殺」によるものである。そのきっかけとなるのはハーゲンの策略によって忘れ薬を飲まされて、グンターの姿でブリュンヒルデのもとに出かけて彼女をグンターの妃としたことである。岩山でジークフリートはブリュンヒルデとの間に抜き身の剣を置いてグンターへの忠誠を守ったとはいえ、ジークフリートはブリュンヒルデに対して不実を働いたことは確かである。たとえそれが忘れ薬のせいであったにせよ、ジークフリートは知らず知らずのうちにここでブリュンヒルデに対して罪を犯したこととなり、それがために最後にはハーゲンによって暗殺される運命にあるのである。

このハーゲンによるジークフリート暗殺の根底にあるものは、やはりニーベルングの指環である。ジークフリートがブリュンヒルデから憎しみを受けることになるのも、きっかけはニーベルングの指環である。『神々の黄昏』第二幕でグンターに伴われてライン河畔のギービヒ家の館に到着したときにも、打ちひしがれたブリュンヒルデはジークフリートが目の前にいるのを認めて、彼がグートルーネと結婚することを耳にすると、よろめいて倒れそうになるが、そのときジークフリートの指にその指環が嵌められているのを見つけて、彼女の心はさらに激しく動揺する。それはグンターが岩山で強引に力ずくで彼女から奪い取ったはずのものだからである。極度の興奮を抑えて、ブリュンヒルデはジークフリートにその指環をどのようにしてグンターからもらい受けたのかと尋ねる。これに対してジークフリートが「これは彼から受け取ったものではない」と答えれば、グンターも「指環など彼には与えていない」と答えるので、ブリュンヒルデはグンターに「あなたが私から奪った指環は／どこに隠したのですか」と詰問する。グンターはひどくうろたえて黙っているばかりなので、ブリュンヒルデは欺きを察して、「私から指環をもぎ取ったのは、／この男です。／欺きの盗人ジークフリートだったのです！」と言って、ジークフリートを責める。それに対してジークフリートは指環を見つめたまま、遠い昔を思い出すように、「この指環は／女から手に入れたものではない。／・・・／かつて強い竜を倒したとき、／妬みの洞穴の前で勝ち得たものなのだ」と答える。ジークフリートは、指環のことを詰問されて、本能的に竜退治の折りにそれを獲得したことを思い出したのであろう。指環がジークフリートの指に嵌められてあるのは、それを狙っているハーゲンにとっても予想外のことであったが、ハーゲンはそれをうまく捉えて二人の間に割って入り、彼女がグンターに与えた指環なら、ジークフリートは欺きでもって勝ち得たのだと主張し、ジークフリートはその償いをしなければならないと訴えるのである。ジークフリートが忘れ薬のために自分のことを忘れ果てているとは

知らないブリュンヒルデは、ジークフリートに裏切られたと思って、「彼（グンター）ではなく、／あそこの人と／私は結婚したのです。／・・・／彼（ジークフリート）は私から悦びと愛を奪い取ったのです」と真相を打ち明ける。ジークフリートが妬みの洞穴の前で指環を勝ち得たことが偽りでなかったと同じように、このブリュンヒルデの言葉も、長い眠りのあと二人は愛で結ばれたという限りにおいては嘘偽りではない。しかし、これが前日のこととして語られているとしたら、重大な言葉である。自らが信義を破っていないことを証明しなければならないジークフリートは、名剣ノートゥングが自分を彼女から隔てていたことを口にするが、それによってジークフリートがグンターの求婚に手助けをしたことがばれてしまったと言ってもよいであろう。男たちの欺きを知ったブリュンヒルデは、同じように欺きでもって仕返しをしようと思って、「剣の持ち主が愛する人に求婚したとき、／その忠実な友ノートゥングは／鞘に収まって、／壁にかかっていた」と打ち明ける。この言葉も初めて二人が結ばれたときのことを意味していれば、偽りではないが、前日のことだとすれば衝撃的な言葉である。今やジークフリートがハーゲンの槍の穂先にかけて、兄弟の契りを破っていないことを誓えば、ブリュンヒルデも同様に誓いを立てる。二人とも決して嘘をついているのではない。ただ二人の話には目覚めのあとの愛の生活とグンター王求婚の時期が互いに交錯しているだけである。このような紛糾に陥ったのも、すべてはハーゲンによる忘れ薬の魔力によるものである。ジークフリートも、またブリュンヒルデもここに隠されている「妖怪の策略」の正体を知らない。ブリュンヒルデにとって真の意味で嘆かわしいのは、あとで彼女が打ち明けているように、彼女のすべての知識をもらい受けたジークフリートが、その力でもってグートルーネを手に入れ、妻である自分を獲物同然に他人に譲り渡してしまったことである。この意味ではトリスタンによってマルケ王にあたかも戦利品のように譲渡されたイゾルデと同じであり、ブリュンヒルデにもイゾルデと同じように「愛」から「憎しみ」が生まれるのである。その彼女の「憎しみ」を巧みに利用したのがハーゲンであり、彼は彼女にジークフリート暗殺を唆すのである。

このようにジークフリートの暗殺にはハーゲンの指環への飽くなき欲望が関与しているのであるが、現時点ではジークフリートにはまだ「指環の呪い」がかかっていない。『神々の黄昏』第二幕第一場でアルベリヒがハーゲンに言っているように、ジークフリートは「指環の価値を／知らず、／その羨ましい力を／全然利用しない」からである。ジークフリートにその呪いがかかるのは、『神々の黄昏』第三幕第一場でラインの乙女たちに指環を一旦返す気になっていたのに、それを止めたときからである。すなわち、ラインの乙女たちから指環に秘められた災いの話を聞いて、それを捨てなければジーク

フリートも今日中に殺されることを予言されると、彼はその脅しには負けまいと思って指環を渡すことを拒否したのである。このときから指環の呪いがかかったと考えてよいであろう。やがてそこにハーゲンたちが現れ、ジークフリートが今度は記憶を取り戻す薬を飲まされて、過去のことを語っているうち、ブリュンヒルデを目覚めさせた折りのことを思い出したところで、ハーゲンによって背後から槍を突き刺されて暗殺されてしまうのである。ジークフリートはこのハーゲンの薬によってすべて操られていたと言ってもよいであろう。トリスタンがマルケ王の重臣メーロトの剣で命を落とすのと同じように、このジークフリートもまたグンターの側近にいるハーゲンの槍で命を落とす運命にあるが、しかし、トリスタンの場合はどちらかと言えば、「自殺行為」であり、それに対してジークフリートの場合は「他人による暗殺」であり、しかもそこには指環に秘められた呪いが関与しているのであり、英雄たちの最期は著しいコントラストを成していると言えよう。

V. 女主人公たちの殉死——「愛の死」と「自己犠牲」——

このようにトリスタンとジークフリートの両英雄の最期は著しいコントラストを成すものであるが、この二人の相手役の女主人公たちはいずれも愛しい英雄のあとを追って殉死することによって、それぞれの愛が再生されることにつながっている。この「死による愛の再生」という点でもトリスタンとジークフリートは共通するところがある。これが第五の共通点である。

伝統的なトリスタン伝説ではこの最終場面では白い手のイゾルデが登場してトリスタンはその嫉妬によって命を落とすことになるのであるが、ヴァーグナーの作品においては白い手のイゾルデは登場しないし、従って、その白い手のイゾルデの嫉妬によってトリスタンが息を引き取ることになるエピソードも取り入れられていない。この作品ではトリスタンは、すでに述べたように、イゾルデが近づいていることを知るや否や、突然「自殺行為」に近い行動として傷の包帯を引き裂き始めるのであり、イゾルデの到着とともに息を引き取ることになっている。イゾルデの到着はトリスタンの死を意味しているのである。ただ到着したイゾルデは、この段階ではまだ「昼の世界」にいて、息を引き取ったトリスタンに必死に呼びかけたあと、気を失い、そのままトリスタンの亡骸の上にくず折れてしまう。彼女が目覚めるのは、マルケ王らと一緒にあとを追って来た侍女ブランゲーネの介抱を受けてからのことである。マルケ王はトリスタンの亡骸を見て、その死を悼むとともに、そのときの争いでメーロトのみならず、クルヴェナルまでもが命を落としてしまったことを嘆く。マルケ王はブランゲーネからすべての事情を聞

き知って、今日はトリスタンに真心を示して、トリスタンとイゾルデを一緒にさせるためにやって来たのである。マルケ王は自らそのことをイゾルデにも伝えるが、しかし、イゾルデはもはや誰にも邪魔されることなく、断固とした自らの決意とともに、トリスタンが先立って行った「夜の世界」に入って行こうとしているのである。彼女はトリスタンの亡骸に眼差しをひたと当てて、感激を募らせながら、トリスタンの昇天のさまを歌い始める。彼は「穏やかに、静かに／微笑み、／その眼を／やさしく開き」、「次第に輝きを増して／きらめきながら／星々の光に囲まれて、／高みへと昇って行き」、「その心は雄々しく高鳴って、／豊かに、気高く／胸のうちにみなぎり溢れている」が、そのさまが見えないかと問いかけ、「その唇から／喜ばしくも穏やかに、／甘い吐息が／やわらかく洩れている」さまを見てほしいと呼びかける。そしてこの調べ、「あまりに多くの奇蹟が／あふれんばかりに、静かに、／歓喜を嘆きつつ、／すべてのことを語りながら、／穏やかに和解をもたらしつつ、／彼の口から響いて、／私の胸の中に押し入って、／羽ばたき昇り、／やさしく反響しながら、／私の周りに鳴り響く」この調べは、彼女だけではなく、皆の耳にも聞こえるのではないかと呼びかける。また「ますます響き渡りながら、／私の周りを包み込むもの」は、「波となって打ち寄せる／やさしい風」、「高波となって打ち寄せる／歓喜の香り」なのかと問いかける。さらに「それらが盛り上がって、／私の周りで音を立てる」のを、「私は吸い込んでもよいのか、／それに耳を澄ませてもよいのか」、「それとも私はそれを啜（すす）り、／その中に身を沈めたらよいのか」、「甘く香りの中へ／息を吐き切ったらよいのか」と問いかけたあと、このいわゆる「イゾルデの愛の死」の歌を次のように締め括る。

この高まる大波の中に、／この鳴り渡る響きの中に、
この世界の呼吸が／吹き渡る宇宙の中に、
溺れ、／沈み、
我を忘れる、／この上ない悦び！

ここではトリスタンが自然の要素となり、宇宙と一体になったさまが称えられている。「清らかな夜の世界」に「溺れ、沈み、我を忘れる、この上ない悦び」こそ、トリスタンとイゾルデが追い求めてきた真実の「愛」なのである。イゾルデが昇天するトリスタンのあとを追いかけるとき、「愛」と「死」が一つになったのである。イゾルデはこの「愛の死」の歌を歌い上げることによって、あこがれの「夜の世界」でトリスタンと結ばれ、二人の愛は宇宙と一体となったのである。これがヴァーグナー独自のトリスタン

世界である。

このイゾルデと同じようにブリュンヒルデも愛しい英雄のあとを追って殉死することになるのであるが、もちろんブリュンヒルデの場合は、イゾルデの場合とは異なって、愛しい英雄の亡骸を焼く炎の中に自らの身をも投ずることによる殉死であり、またそのいわゆる「自己犠牲」もイゾルデの場合とは別の意味を持っている。

ブリュンヒルデは、これまで述べできたように、ハーゲンの謀の餌食となってジークフリートに対して「憎しみ」を抱き、その英雄の暗殺までも唆されたのであったが、ラインの乙女たちから真相を聞き知って、知識を取り戻して、ジークフリートの亡骸が運ばれて来たところに姿を現す。そこではすでに指環の呪いからグンターがハーゲンと争い、命を落としている。今やしっかりとした厳かな姿で前景に歩み出て、一同に騒ぎを止めるよう言い渡すと、グートルーネが床から飛び起きて、この館に災いをもたらした女だとしてブリュンヒルデを責め立てる。このグートルーネの攻撃に対してブリュンヒルデは冷静に「あなたは決して彼の妻ではなかった。／情婦としてあなたは／彼を縛り付けただけのこと。／彼の本当の妻はこの私です。／ジークフリートはあなたに会う前に、／私に永遠の誓いを立てていたのです」と答える。この場面の二人の女性の問答は『ニーベルンゲンの歌』における両王妃口論の裏返しであることは、拙著ですでに述べたことがある[10]が、それと同時にこの場面は伝統的なトリスタン伝説の最終場面において王妃イゾルデが白い手のイゾルデを押しのけてトリスタンの亡骸に近づき、「奥方様、そこを退（ど）いて、私を近くに寄らせてください。あなたよりも私の方がこの方のために涙を流す資格があるのです。あなたには到底想像もできないくらい、私はこの方を愛していたのです」[11]と告白する場面を彷彿させる。いずれにしてもこのブリュンヒルデの打ち明け話によって、ジークフリートがブリュンヒルデの本当の夫であり、忘れ薬で彼女のことを忘れていただけであることをグートルーネは知って、羞恥のあまりジークフリートから身を離し、兄グンターの亡骸の上に身を屈め、最後まで身動きしないま

---

10) 石川栄作『ジークフリート伝説――ワーグナー「指環」の源流』講談社学術文庫 2004 年 256 頁参照。

11) 1170 年頃に書かれたと推定されるアイルハルト・フォン・オーベルク（Eilhart von Oberg）作『トリストラント』（Tristrant ）における 9427-31 詩節の邦訳。Vgl. Danielle Buschinger/Wolfgang Spiework(Hrsg.): Tristan und Isolde im europäischen Mittelalter. Ausgewählte Texte in Übersetzung und Nacherzählung. Philipp Reclam jun.Stuttgart 1991. S.188.

までである。

今や舞台を独占するのはブリュンヒルデだけであり、「神々の力」のライトモチーフが鳴り響くと、彼女は厳かに身を起こして、「ラインの岸辺に／太い薪を／高々と積み重ね」、「ジークフリートの馬をこちらへ連れて来るよう」命じる。この場面から最終場面までがいわゆるブリュンヒルデの「自己犠牲」であり、彼女はジークフリートの亡骸を焼く炎の中に自らの身を投じて殉死する決意である。ジークフリートの死体を見つめると、彼女の顔つきはますます安らかな神々しさを増して、ジークフリートと自分についての真相を語り始める。

太陽のように明るく／彼の光は私のために輝いている。
私を裏切った彼は、／いとも純粋な人であった。
妻を欺いて、／友に誠実を尽した人。
ただ一人自らにとって大切だった／自分自身の愛しい妻から
自らを彼は剣でもって隔てた。／彼以上に誠実に
約束を守った者はいない。／彼以上に純真に
愛した者もいない。／しかし、すべての誓い、
すべての約束、いとも誠実な愛を／彼ほどに欺いた者もなかった！

このブリュンヒルデの言葉によってジークフリートが抜き身の剣でもってグンターへの誠実を守ったことが明らかにされている。ジークフリートは友グンターとの契りを確かに忠実に守ったが、しかし、それは一方では妻ブリュンヒルデとの誠実な愛を欺いたことをも意味している。たとえ忘れ薬のせいであったにせよ、妻を裏切ったことに変わりはないのである。どうしてこういうことになったのか。ブリュンヒルデは、天を仰ぎながら、自らの苦しみを神々に次のように訴えかける。

ああ、誓いの／神聖な守護者たちよ！
あなた方の眼差しを私の限りない／苦しみに注いで、あなた方の
永劫の罪を悟ってください！／いとも高貴なる神よ、
私の嘆きを聞いてください！／彼の最も勇敢な行為は
あなたが切に望んだものなのに、／あなたは、それを実行した男を、
自分の陥るべき呪いへと／捧げてしまったのです。

このブリュンヒルデの言葉は、ジークフリートが神々の永劫の罪の犠牲となったことを明らかにしているという点で注目に値する。ジークフリートの死は今や神々の黄昏が近づいていることの証として捉えられている。ここにヴァーグナーにおけるジークフリート暗殺の特質がある。ヴァーグナーにおいては神々の黄昏とジークフリートの死が並行して展開されているのである。ブリュンヒルデはジークフリートの死骸を前にして、神々に黄昏が訪れ、ヴォータンはついに安らぎを得るであろうことを悟って、二羽のカラスを故郷へ送り返すことを決意する。それからジークフリートの亡骸を薪の山に運ぶよう指示すると、彼女はジークフリートの指から指環を抜き取り、その指環を自分の指に嵌めてから薪の山に向かう。家臣から大きな燃え木を受け取ると、彼女はそれを振り上げながら、カラスたちにヴォータンのもとに帰るよう命じるとともに、岩山で燃えているローゲにワルハラへ帰るよう伝えてほしいと指示するや、燃え盛る松明（たいまつ）を薪の山の中へ投げ込む。すると薪の山はたちまち燃え上がる。ブリュンヒルデは連れて来られた愛馬グラーネに走り寄って、一緒に炎のジークフリートのもとへ行く挨拶を送ると、勢いよく馬に飛び乗り、猛火の中へ一挙に飛び込むのである。イゾルデとはまったく異なった方法での殉死である。すると突然ラインの水が溢れ返る。指環を奪う機会を窺っていたハーゲンは、指環を追って水の中に入るが、三人の水の乙女たちによって深みに引き込まれてしまう。ジークフリートの遺体を焼く炎は天上の神々の城ワルハラにも燃え移って、神々はこうして滅びてしまうのである。

この最終場面の結末は、一体、何を意味しているのであろうか。炎の中へ身を投げるブリュンヒルデの行為は、『ヴォルスンガ・サガ』に由来するが、ヴァーグナーではこの彼女の殉死の中には「権力に対する愛の勝利」がほのめかされていると解釈してもよいであろう。『ジークフリート』第三幕においてジークフリートが岩山の周りに燃え上がる炎を飛び越えてブリュンヒルデの愛を勝ち得たように、ブリュンヒルデも今やこの最終場面で気高き英雄の亡骸を焼き尽くそうと燃え盛る炎の中へ飛び込んで殉死することによってジークフリートの永遠の愛を勝ち得たのである。赤々と燃え盛る炎は二人の愛の炎であると考えることもできよう。二人の愛の炎はやがてギービヒ家の館から天上の神々のワルハラの城にも燃え移って、まさに神々は黄昏を迎えようとしている。ジークフリートの死はこうして神々の没落をもたらしたのであるが、しかし、ブリュンヒルデの「自己犠牲」によってジークフリートはブリュンヒルデと永遠の愛で結ばれたのであり、「ジークフリート」のライトモチーフに続いてブリュンヒルデの「愛による救済」のモチーフが奏でられるところからも明らかなように、その廃墟の中からは「権力の世界」に代わってやがて愛する人間の支配する新しい「愛の世界」が生まれてくるこ

とが暗示されているのである。ヴォータンやアルベリヒおよびハーゲンなどを代表とする「権力の世界」は滅び去って、ジークフリートとブリュンヒルデの「死による愛」が勝利を収めたのである。ブリュンヒルデの「死による愛の再生」という意味では、ブリュンヒルデの「自己犠牲」はイゾルデの「愛の死」に通じるものがあると言えよう。

結び

以上のように見てくると、ヴァーグナーにおけるトリスタンとジークフリートは数多くの共通点が認められながらも、それらは常にコントラストを成すように対置されており、テーマの点でも対極にあることが明らかである。一言で両英雄の違いを表現すれば、「闇」のトリスタンと「光」のジークフリートであろう。しかし、いずれもめざすところは「死による愛の再生」であり、ヴァーグナーは「闇」のトリスタンを作り上げることによって初めて「光」のジークフリートに辿り着くことができたのであり、畢生の大作『ニーベルングの指環』四部作を完成させるためには、『トリスタンとイゾルデ』の製作が是非とも必要であったのではないだろうか。

ヴァーグナーの『トリスタンとイゾルデ』は「夜の世界」と「昼の世界」との対立の中で「夜へのあこがれ」を歌ったものである。二人の主人公の愛は第一幕では「沈黙」のうちに展開され、もどかしい筋の展開となっており、それが表面に現れるのは、二人が杯の中に入っているものを飲んでからである。しかも二人が死を覚悟しながら、一度目の自殺行為として「死の毒薬」と思って飲んだものが、実は「愛の媚薬」だったのであり、それによってヴァーグナー独自のテーマが展開されることとなった。そのテーマに従って第二幕では「昼の世界」と「夜の世界」の対立が展開され、その対立によって二人は「夜の世界」へのあこがれを強めていくが、最終場面でマルケ王やメーロトなどの登場によって、その「夜の世界」へのあこがれは遮断されてしまう。そこでトリスタンは二度目の自殺行為によって自ら強引に「夜の国」へ行こうとする。しかし、それでもトリスタンは一人では「夜の世界」に入って行くことができず、第三幕においてまだイゾルデのいる「昼の世界」に舞い戻って来る。そこで遠い昔よく耳にした「なつかしい調べ」を聞きながらイゾルデへのあこがれを一層強くすることによって、ついに三度目の自殺行為を経てイゾルデを「夜の世界」に誘い出すことができた。最終場面でマルケ王が姿を現しても、イゾルデはもはや動じない。「愛の死」を歌い上げることによって、イゾルデはあこがれの「夜の世界」でトリスタンと結ばれ、二人の愛は宇宙と一体になったのである。このように二人の愛は第一段階では「沈黙」の殻を打ち破り、第二

段階では「昼」と「夜」の対立によって「夜の国」へのあこがれを強め、第三段階においてようやく「愛」と「死」の合一を実現するのである。

この『トリスタンとイゾルデ』における「昼の世界」と「夜の世界」は、『ニーベルングの指環』四部作ではそれぞれ「権力の世界」と「愛の世界」にあたると言える。『指環』四部作全体はまさにこの「権力の世界」と「愛の世界」の闘いであり、その対立の中から「愛の世界」が勝利を収めるのである。その「権力」と「愛」の葛藤は第一作目『ラインの黄金』第一場においてすでに提示されており、侏儒アルベリヒは愛を断念して権力を手に入れるべく、ラインの河底から黄金を奪い取り、それから指環を作り上げた。しかし、その指環は策略によってヴォータンに奪われ、その指環に呪いをかける。ヴォータンはワルハラ築城の代償としてそれを巨人族に渡してしまうが、さっそく指環の呪いによって巨人族は兄弟喧嘩をして、弟ファフナーが兄ファゾルトを撲殺して、指環とともに黄金を一人占めにして、竜に化けて森でそれを護っている。なんとしても指環を取り戻したいヴォータンは、人間の姿で地上に降りて人間の双子の兄妹を儲ける。その人間族に指環奪還の夢を託したが、しかし、ヴォータンは第二作目『ヴァルキューレ』において妻フリッカの主張に負けて、その人間族を犠牲にしなければならなかった。父ヴォータンの真意を悟り、また双子の兄妹の愛の強さを目にしたブリュンヒルデは、双子の兄ジークムントに加勢することは果たせなかったが、その妹ジークリンデは東の方の森に逃がすことができた。ジークリンデがその森で産み落とすのがジークフリートであり、母亡きあと、ジークフリートは鍛冶屋ミーメに養育される。第三作目『ジークフリート』において侏儒アルベリヒの弟ミーメはこの英雄の力を利用して、竜を退治してから指環を一人占めにすることを企んでいるが、ジークフリートは小鳥の助言によって邪悪なミーメを成敗するとともに、岩山でブリュンヒルデを目覚めさせて、二人は愛で結ばれる。しかし、その二人の愛は第四作目『神々の黄昏』において権力志向のハーゲンの策略の餌食となって滅びていかなければならない。四部作全体は「権力」と「愛」の対立によって展開していることが明らかであり、『神々の黄昏』第三幕最終場面において「権力の世界」は滅び去って「愛の世界」が生まれ出てくるということは、すでに上で述べたとおりである。

ジークフリートとブリュンヒルデの「愛の世界」はまさにトリスタンとイゾルデの「夜の世界」である。「夜の世界」に生きるトリスタンは、まさに「愛の世界」に生きるジークフリートである。『トリスタンとイゾルデ』は闇の中から見た「死による愛の再生」の物語だったのであり、到達目標は『指環』四部作と同じだったと言える。ヴァーグナーは『ジークフリート』第二幕の途中で作曲を中断して、『トリスタンとイゾルデ』の

製作に取り掛かったが、その作品に携わっている期間中、常に彼の脳裏の中にはジークフリートとブリュンヒルデの愛の物語があったことは確かであろう。「闇」を通して初めて「光」が一層明るく輝くように、ヴァーグナーは闇の「トリスタン世界」を貫くことによって、初めて本当の意味での「光の世界」のジークフリート世界へと到達することができたのである。その意味において『トリスタンとイゾルデ』製作中における『指環』四部作の中断は、決して「中断」ではなく、『指環』四部作完成のためにはどうしても克服して通過しなければならない一つのプロセスとしての長くて暗い「トンネル」だったのである。 （２００９・７・３１）